

新居浜市議会 市民との意見交換会 議会フォーラム2020

開催報告書



令和2年11月25日(水)・26日(木)

新居浜市議会

目 次

	ページ
市民との意見交換会の概要	1
<記録>	
11月25日 市民福祉委員会	2～13
11月25日 経済建設委員会	14～23
11月26日 企画教育委員会	24～37
資料（会場ホワイトボード）	38・39

新居浜市議会市民との意見交換会「議会フォーラム 2020」の概要

①開催目的

市民との意見交換を通して市民の多様な意見を把握し、政策形成に反映させるため、市民（団体）との意見交換会を開催する。

②開催結果 ※各常任委員会を2日に分けて開催

日時 令和2年11月25日（水）19時～20時59分

第1部 市民福祉委員会

- ・参加団体 新居浜市地域コミュニティ再生検討委員会、新居浜市連合自治会
- ・テーマ「自治会の加入促進について」

第2部 経済建設委員会

- ・参加団体 新居浜商店街連盟、新居浜登道南商店会
- ・テーマ「商店街の活性化について」

令和2年11月26日（木）18時55分～20時06分

企画教育委員会

- ・参加団体 きてきてにいはま+
- ・テーマ「移住者から見た新居浜の魅力について」

会場 あかがねミュージアム 多目的ホール

コーディネーター 愛媛大学社会連携推進機構：前田 眞 教授

日時 令和2年11月25日（水）19時～19時53分

■司会 市議会議員 仙波 憲一



■開会挨拶 市議会議員 永易 英寿



<第1部 自治会の加入促進について>

【コーディネーター】愛媛大学社会連携推進機構：前田 眞 教授

【パネリスト】※敬称略

（市民福祉委員会）

- ・小野 辰夫議員（委員長）
- ・白川 誉議員（副委員長）
- ・山本健十郎議員
- ・伊藤 優子議員
- ・藤原 雅彦議員
- ・永易 英寿議員
- ・篠原 茂議員
- ・片平 恵美議員
- ・河内 優子議員

（新居浜市地域コミュニティ再生検討委員会）

- ・日野 幸彦（会長）
- ・久石 保（副会長）
- ・星加 勝一（委員）

（新居浜市連合自治会）

- ・馬越 健（防災部）
- ・齋藤 ミヤ（女性部）

記録

●小野議員＜委員長趣旨説明＞

近年、生活様式の多様化、隣近所の交流の希薄化などが進み、自治会の役員を務めるのが面倒だ、高齢になり自治会費が重荷であるなどの声が聞かれ、自治会加入率の減少が続いている。

しかしながら、30年以内に約80%の確率で起こるであろう南海トラフ巨大地震や、急速に進む少子高齢化を考えると、防犯面や防災面などでお互いに助け合う精神が必要であり、自治会加入率の向上が急務であると考えられることから、現在、地域コミュニティの再生に向けて検討を重ねられている皆さんを交えて、自治会の加入促進策について考えてみたいと思う。



○前田教授

このテーマについて、関係団体の皆さんから、今こういう課題があるとか、こういうふうになっているということも含めて発言をいただければと思う。

●星加委員（新居浜市地域コミュニティ再生検討委員会）

以前だと、葬儀は自治会が仕切っていたから、自治会に入っていないと村八分に遭いかねないということではほぼ100%加入し

ていたが、今は業者が全て請け負ってくれるため自治会のお世話にならなくても葬儀ができるようになってきている。また、日常生活においても、自治会に加入していなくても何ら困らない。生活の多様化に伴い、自治会に入っていることがかえって煩わしく思われている。また自治会に入っていると、役員が順番で回ってきて自治会の世話をしなければならない。これが自治会費を払う以上に負担となって、自治会を脱退するケースが多くなっている。今後はこうした問題の解決に取り組んでいかないと、旧態依然とした運営を続けていたのでは自治会加入率はさらに下がっていくと思われる。具体的にはまた後で説明させてもらう。

○前田教授

現場でいろいろ御苦労されていると思う。今御意見があったが、もう少し深掘りするとこのようなことがあるという話があれば御発言いただければと思う。

●久石副会長（新居浜市地域コミュニティ再生検討委員会）

太鼓台があるところは、新調や修理をするときにたくさんの費用が要る。高齢になれば、役員が回ってくると、役員ができないので自治会を辞めたいと言われる。自治会費はさほど問題になっていないようだが、自治会でいろんな活動をするときのお手伝いができないということを聞く。

○前田教授

高齢化すると動くのも大変になるということもあるかと思う。そういった課題があ

るが、加入率を上げるためにこんな工夫をしているといったことはあるか。

●馬越さん（新居浜市連合自治会）

防災の立場からは、助け合いをしなければいけないのではないかという話をしている。脅すわけではないが、いざというときは自治会に入っていないと大変だという形で、加入率の減少に歯止めをかけている。行政も大規模災害の時は行政をあてにしないでくださいとはっきり言いながら表と裏と違う部分があるので、その辺りの難しさをもう少し認知いただけたらと思う。

○前田教授

防災上は自治会の役割がどうしても必要ということは訴え続けてというところがあると思う。

●齋藤さん（新居浜市連合自治会）

高齢者になると、役割が回ってくるのが大変という意見が非常に多い。また、若い方は自治会の役割、どういうメリットがあるのか、自治会に入ってどういうことができるのかということと言われるが、若い人たちの加入率が低いということは、自治会の役割自体を十分理解できていないのではないかと思う。例えば、ごみの分別をしないままごみステーションに持って行って、ごちゃごちゃになって残されるが、そういったものを私たち役員が後始末をしないといけない。自治会に入っただくと、規則等もきちんと理解して、守ってもらえるのではないかと思うが、まずそういうことができない。それから地域の中での触れ合

い、運動会、文化祭、お祭り、出前講座などいろんな事業があるが、そういうことにも全く参加できない。例えば今馬越さんとも言われたが、地域の中での困りごとや災害時において、日頃から地域の方との連携や触れ合いがなければ、いざというときに助け合いができないのではないかと思うので、まず自治会に入らない人たちに、なぜ入っただけいけないのか、その理由についてアンケートを取って、解決できるものであれば自治会でまた考慮して、対策が取れるのではないかと思う。まずは自治会の役割をきちんと理解していただくことが大切ではないかと思っている。

○前田教授

その辺をどう伝えていくのか、そういう思いは皆さんお持ちだと思うが、どうやったら伝わるのかということもある。

●星加委員（新居浜市地域コミュニティ再生検討委員会）

私は、自治会加入率の減少について2つ考えていることがある。1つは、少子高齢化で高齢者が多い、もう1つは、役員の負担が非常に重いということで自治会を辞めたいということを知るので、この2点について感じることを述べたい。高齢者については、自治会全体でバックアップしてあげて、役員から外すとか、高齢者に代わってしてあげるとか、自治会費を免除するとかといったことは各自治会でもやっていると思うが、そういったことをさらに推進してはどうかと思う。役員の負担軽減について

は、校区でやっている行事の簡素化、あるいは思い切って廃止するといったことが考えられる。船木校区では、役員の負担を軽減して地域の活性化を図るという、相反するようなことを試みているが、その一つとして、協力員制度を推し進めていきたいと思っている。自治会長さんは1年で交代するところが多いが、地域のために協力しようという人もいるので、そういう人を集めて、行事の準備や片付けなどに携わってもらって、極力自治会役員の負担を少なくしたいということを考えている。あと、寄附金なども、これまでは半強制のような形だったが、今は、したい人はする、したくない人はしなくてもいいということもやっている。また校区の役員、体育部長や女性部長、福祉推進員などをなかなか自治会で出せないところもある。そういうところは無理して出さなくてもいいということで進めており、役員の負担をできるだけ少なくして、気軽に自治会長をやっていただけるような雰囲気づくりに努めている。



○前田教授

協力員制度というのは役員を応援する人がいるというイメージか、役員だけに任せないというような感じか。

●星加委員（新居浜市地域コミュニティ再生検討委員会）

役員とは別にそういう人がいる。

○前田教授

そういう人たちが役員を応援するとか、手助けするような形の制度があるということ。

●日野会長（新居浜市地域コミュニティ再生検討委員会）

今いろいろ地域の問題が出たが、連合自治会としては、アンケートなども実施しており、自治会の加入についての漫画も今年作っている。そして毎年、自治会加入の手引きQアンドAや、自治会長さんのための便利帳を作るなど、我々としても努力はしているが、なかなか。そしてもう一つ気になるのは、今新居浜市の人口が約11万8,000人だが、その割に世帯数が増えている。昔は4人、5人いた家族が核家族化で世帯数が増えてしまったため、今現在新居浜市の連合自治会加入率は61.1%と言われている。自治会加入率は人口ではなく世帯数で計算するので、昔と比べると人口がどんどん減っているのに、約1万軒増えた。だから加入率が悪くなるということも現実として起きている。その中でも若い人の一人世帯が多いので、自治会加入率が悪いと考えると、やはり若い人の理解はいただけないのかなという感じを持っている。いろいろ努力はしているが、なかなか加入率が上がらない。本日はこのような場をもっていただいたので、ぜひPRをしていただきたい。大変大

事なことなのでよろしくお願ひしたいと思う。

○前田教授

現場でかなり御苦勞されている話があったと思う。そういう意味では、いろんな工夫をしながら、自治会に加入しているメリットをお伝えしながら頑張っておられると思うが、今言われたことに対し、何かこういう応援ができるのではないかとといったことがあれば。例えば葬儀等の行事や、加入しなくても生活に支障がない、加入することの煩わしさがある、役の負担、太鼓台に関すること、そもそも高齢になると動けない、自治会に入るメリットがないといった話があるが、そういったことに対して何かか。

●永易議員

太鼓台のことで、寄附とか新調に関しては確かに負担になる部分もあるが、例えば私たちの地域では、太鼓台があることによって若い子が自治会に入ってくれて、校区の運動会や文化祭のときにテントを準備してくれたり、餅つきをしてくれたり、校区の廃品回収も中心的に自治会内でやってくれたりしている。太鼓台があることによってほかの地区からも若者が自治会員を通して、文化祭や校区の運動会、廃品回収も手伝ってくれるので、太鼓台があることによって若者がその地域に集うということにはなってくると思う。

○前田教授

例えば、今の話は自然発生的にそうなる

のか、そこにいろんな学びというか教育というようなことをお伝えするようなことがあるのか。

●永易議員

高津校区の場合、校区の文化祭などで、各太鼓台の青年団が餅をついているが、やはり青年団に入りたての子などはなかなか餅のつき方が分からないなどいろいろあるので、そういったことを先輩から学んだり、災害時にはテントの設営が必要になってくるが、そういったところをうまく引き継いでいったり、いろんな人と挨拶をしなければいけないといったコミュニケーションの取り方といったことも、太鼓台があるからこそ若者が集まってきて、地域外の子もこの太鼓台をかきたいという感じになり、普段から地域活動をしていないと指揮はできない、役は与えられないといったことを言っているので、そういった地域活動の参加のきっかけの一部にもなっている。

○前田教授

そういう縦の教育の場みたいなものも、太鼓台を通してできているということ。

●篠原議員

私の自治会は新居浜市の郊外にある光明寺地区だが、戸数が約 100 戸で、全世帯が自治会に入っているので自治会加入率は 100%である。なぜそうなっているかと考えると、昔ながらの行事もまだ継続してやっているし、年に 2 回ぐらい道路の草刈りなどもしている。私たちの自治会では、全て行政にお願いするのではなく、自分たちで

できることは自分たちでやろうということ
でやっており、その行事に出なかったら道路
に草がいっぱい生えていて通りにくいとい
う感じになるので、ずっと全員が出てきて
やってくれている。災害についても話が
あったが、私たちの地区から公民館への距
離は 2.5 キロメートルぐらいあり、災害発
生時が夜だったら、やはり自分たちの自治
会館が一時避難場所になるということにな
るので、みんなで助け合いながら生活して
いくためには、全員が自治会に入って、災
害が起こったときも自治会館が一時避難場
所で、災害が落ち着いたときに公共の場所
である避難所に移動すると、そのようなこ
とをみんなで話し合いながら運営している。



○前田教授

みんなでそういうことが共有できている
という部分がすごくあると思う。

●藤原議員

先ほど、委員長の提案趣旨の中で、生活
様式の多様化とあった。僕も 10 年間自治会
長をさせていただいている。10 年前に自治
会長になったときと 10 年経った今では若干
様相が変わっている。生活様式が変わった
のであれば自治会組織の在り方も変化して
いかなければいけないと思う。自治会長に

なって昔やっていたことをやめる、これは
大変勇気があることである。でもその勇気
を持ってみんなで集まって、やるべきこと
をみんなで話し合う。つまり役員負担をど
う軽減させていくかということが大事だと思
う。私が自治会長になる前には、月 1 回
大体 1 時間ぐらいかけて組長会をしていた
らしい。大半は女性の方が出てくるが、7
時から 8 時までの 1 時間というのは女性に
とっては大変忙しい時間帯である。僕が自
治会長になってからは長くても 20 分ぐらい
で切り上げて、その代わり内容はきちんと
簡素化して、口頭で説明して極力時間を短
くした。そして少し話が飛ぶが、僕が 10 年
前自治会長になったときは組内で葬儀を出
していた。これは結構大変で、受付する役
員などを全部手配しないとイケない。でも
今は葬儀場でやっていただくので、それは
全部しなくていい。考え方によっては自治
会の役員の負担もある意味大分軽減したの
ではないのかと思う。そういったことで、
物事はある面から捉えればデメリットかも
しれないが、別の面から見ればメリットが
あるかもしれない。そういったことをきち
んと踏まえて、自治会組織も多様化して取
捨選択をしていくのがこれから発展してい
く方法だと私は思う。

●伊藤議員

先ほどの皆さんの意見で、都市部とそう
でない地域では自治会組織が違うのではな
いかということをおっしゃっていたが、若い人
と高齢者ではいろいろ要求が違うという話

もあったので、これからはニーズに合わせた組織をつくっていかねばいけないのではないかと思う。都市部ではマンションや借家住まいの人などが増えているところもあると思うが、自治会とどう関わってもらうか、また、マンションや借家住まいの人たちにも理解をいただいて入っていただくのも自治会加入率の向上につながるのではないかと思う。それともう一つ、松山などではやっているが、あらかじめ不動産屋さんなどと連携をとって、自治会に加入してもらうようなお話を、行政や連合自治会で話し合っただけで持っていくのが加入率の向上につながるのではないかと思う。

●小野議員

太鼓台の話が出たが、太鼓台にはメリットとデメリットがある。やはり太鼓台があるから自治会長や役をやりたいくないという人も結構いらっしゃる。新調すると寄附を求められ、そうしたら私は自治会を辞めるということになる。それでも、若い人は太鼓台があるゆえに輪ができる、お正月よりもお祭りに帰ってくるという新居浜の特徴がある。自治会ができたときと今とは時代背景が大分変わってきているのではないかと思う。それぞれ自治会によって工夫されているようだが、準会員制度、会費を半額にして役はやらなくていい、ごみは出してもいいというような制度を導入しないと維持が難しいのではないかと思う。私の個人的な意見だが、自治会に入っているとあかがねポイントのようなポイントが付くとい

ったようなことをしないとなかなか難しいという感じがする。

●片平議員

今の若い世代は、多分子供の頃にもう家庭用ゲーム機や携帯ゲームで遊んでいたりなど、私たちが子供だった頃と比べたら遊び方も大分変わったと思うし、また1週間で九も十も習い事をするなどして、自分たちの自由な時間で集団づくりをするとか、知らない集団に入っていくといった経験がもともと少ない世代なのかなというふうに思っている。今の子供たちもとても忙しいので、大人になった時には、ますます集団づくりや知らない所に入っていくのが苦手になったりしないかという心配もあるが、災害などがあると若い人たちは結構積極的にボランティアに行ったりしている。それを見ていると、知らない所に入っていくのは苦手だけど、それでも自分も誰かの役に立ちたいという気持ちが若い方の中にもあるのかなと思うので、自治会はあなたにとってこんなメリットがあるよというアプローチもとても有効だと思うが、あなたの力が自治会で役に立つよというアプローチの仕方ももしかしたらあるのかなと思っている。

○前田教授

若い人たちの力を引き出すということもできたらいいと思う。

●山本議員

私は単位自治会長を5年ぐらいやったし、10年前から自治会の班編成に関する会長も

ずっとやってきている。岸之下自治会というところだが、班の単位が20人一班ぐらいになって、それが10人ぐらいにどんどん減っていく。太鼓台の運営委員会や青年部や子供会に自治会も任せたらいいのではないかという極端なことが、特に若い人から出てくる。それをやるともう自治会組織ではないような形になる。自治会が必要かどうか、必要であれば何をしなければいけないのか、これは自治会も行政も考えなければいけない。日野会長が以前条例をつくったらどうかという話をされていた。先ほど防災の話があったが、平成16年の災害があったときに、愛リバー関係で、盛んに県や市を勧誘して河川の整備などをしていたが、今はそういった機運が全然起こっていない。南海トラフとの関係も含めて、これはやはり粘り強く自治会長さんを含めて説明をしていかないと仕方がないのではないか。これは行政と自治会役員たちが訴え続けないと仕方がないのではないかと私は思う。



○前田教授

なかなか特効薬がない中で、それを探していけないといけないのは大変かと思う。

●河内議員

若い世代の方の自治会未加入が問題になっているとお聞きしたが、自治会という言葉にはとても固くて重たい、暗いイメージがある。若い方は自治会という言葉を知ると、どうしようかなと悩むのではないかと思う。思い切って、自治会の役割がお互いを助け合う会であるなら、名前をお互い様の会のように、いずれ自分たちも自治会の方にお世話になるという意味を込めて変更するのも一つの手かと思う。あと、皆さんとお話しする中で、人と人の触れ合いが最近少なくなっているというお声をお聞きする。そうであれば、触れ合いが持てるお茶会のようなことが自治会の中で開ければ、人と人の触れ合いが増えていいのではないかと思った。

●白川議員

皆さんの御苦勞で60%強を維持されているということだが、そもそも生活が多様化されて、ライフスタイルも変わっている中で、そう簡単にこの課題は解決できないと思っている。そうであれば、すごく極論というか、振り幅がある議論をするような仕掛けも必要だと思う。例えば、今僕たちの地域で具体的にやろうとしているが、高齢者の方や子育て中で足に困っているママなどに対して、地域の中で乗り合いのようなことを進めようとしている。その中で、本当は皆さんに利用していただきたいが、わざと自治会に入らないと利用できないといったことをやるとか、ほかには、市のいろんな補助メニュー、コミュニティー活動と

いった補助金などに関して、自治会に入っていないのなら評点を下げるとか、それもまたいろいろ議論が巻き起こると思うが、賛否両論覚悟でそういったことを一回仕掛けないと、なかなか正論や理屈を言っても、今入っていない方には多分刺さらないと思うので、そういったこともいろいろ皆さんと知恵を出してできたらと思う。

○前田教授

少し過激な発言も出たが、今の話を聞いて、これならいいといったことがあれば。

●日野会長（新居浜市地域コミュニティ再生検討委員会）

自治会がなぜ始まったかと言うと、要は隣近所の付き合い、それが四、五軒の付き合い、さらに大きくなって地域に広がり、あるいは新居浜市全体に広がってきているものであり、その付き合いが煩わしくなったのが現状であって、なかなか難しい問題である。メリット、デメリットと必ず言われるが、本当のことを言うと、自治会にはメリットはなく、精神的な問題だけである。例えば災害時に、自分が助かったときには隣の嫁さんや子供を助ける、さらにその隣を助ける、これが普通だと思う。そして一人ではできないので集団になってやらないといけない。そのときに自治会に入っておけば、やはり人間なので自然にその人を助けに行くのではないか。入っていなかったら隣近所の関係がないので、分からないということになるという感じがしている。市議会議員にお願いしたいのは、極論である

が、自治会員を優遇していただきたい。私たちは全部ボランティアで、何かをやれと言われても、やはりそれには限度がある。市長にも冗談で言ったことがあるが、できれば自治会員でなければ市民ではないというぐらいの条例をつくってくれたらありがたいという話をさせていただいたが、市長は笑っていた。それは極論であるが、それぐらいの気持ちを持っていないとなかなか自治会加入率の向上は難しくなっているのではないかと、これは日本全体の流れだと思う。だからそういう極論まで到達しないと難しくなっているのではないか。私たちも努力に努力を重ねているが、1年で交代する自治会長さんが今半分おられる。例えば5月に自治会長になったら半年間何も分からない。後は次の人に任せたら済んでしまうという自治会長の責任もある。そういう人だと、寛容という変な言い方になるが、お願いするのも程々な言い方になるのではないかという感じがしている。それを何とか長くしていただけないかと言っているが、役員の成り手不足があるという感じである。

○前田教授

なかなか答えが出しにくいテーマである。

●馬越さん（新居浜市連合自治会）

先ほどから問題になっている太鼓台や葬儀など、メリット、デメリットというのは確かにあると思う。しかし、議員の皆さんが言われるように時代背景にあった状態にしなければいけない。以前は60歳定年で元

気な人が地域のことをしてくれていたが、今は75歳まで働かなければいけない。できたら現役の人ができる状態の自治会組織を考えるべきだと思う。金銭的な負担などいろんな問題も出てくるし、今は南海トラフという大地震から生き残るという一つの目的も皆さん共通していると思うが、新居浜は幸か不幸か災害が少ないと思われているので、その認識も少ない。防災などについて小さいときから教育していただく、防災士もできたら小学生ぐらいから取れるようなイメージで地域の人役に立っていくというような何らかの施策をしていただければ幸いである。



●星加委員（新居浜市地域コミュニティ再生検討委員会）

不動産屋に相談したらどうかということ、伊藤議員が言われたが、これは十数年前にトライはしたが、不動産屋の方から、自治会に入ることを条件にしたら入居を断られるという話があり、尻すぼみになった。あの頃と今では時代が変わっているので、また日野会長とも相談して、取り組めたら取り組みたいと思う。そして役員の負担軽減の件で藤原議員が言われたが、船木校区では住民運動会を大体朝9時から昼の3時

ぐらいまでやっていたが、これを半日にして打ち上げは各自治会に持ち帰ってやってくれということで去年初めてやったが、役員の負担も非常に軽くなり、よかったのではないかと思っている。

●日野会長（新居浜市地域コミュニティ再生検討委員会）

先ほどからいろいろ議論が出ているが、行政にもお願いして、市外から転入してきたときや、家を建てる際の窓口で、自治会に加入してくださいという文書を出してもらっている。理解してくれた人は結構入っただけだが、なかなか理解いただけない。今星加委員が言われたマンションの問題だが、地域やマンションによって積極的にオーナーが入るように勧めてくれるところもある。オーナーが尻込みするとなかなかうまくいかない。しかし、行政においては必ず入居した人にはチラシを出して、自治会に入ってくださいというお願いをいただいている。私は県の会長をしていたが、おそらく新居浜は自治会加入率が愛媛県下で一番いい。県下でもトップクラスの自治会であることは間違いない。全国へ研修に行くが、全国でも有数の自治会であることは間違いない。これはどういうことか、というと、正直な話、補助金をよくいただいている。それでも加入率が落ちてきている。全国でも落ちてきている。そして、都会と田舎ではだいぶ違う。私のところも、篠原議員と同じように100%であるのであまり問題はないが、全体ではそういうこと

が起きている。変な言い方になるが、新居浜の中でも都会と田舎という地域差がかなりあるのではないか。永易議員が言われたように、太鼓台は若者が入ってくれるというメリットもあるが、地域によっては逆に寄附の問題で高齢者が辞めるということが起きている。若者は積極的な人、特に太鼓台関係者は自治会に入ってくれる。これは大変ありがたいが、太鼓台にあまり興味を示さない人にとっては少しまずいかなという感じがしている。

○前田教授

あつという間に時間が過ぎてしまい、そろそろまとめに入らないといけないかと思うが、最後に一言何か。

●齋藤さん（新居浜市連合自治会）

ごみ問題について、女性の会の取組として、当番を決めて分別がきちんとできているか点検し、間違えている人に指導した。そうすると、次からきちんと守るというふうに理解をしてくださって、ごみの分別ができてきちんと出せるようになるというメリットもあった。だから、自分たちに何ができるかということを考えて、大それたことはできなくても小さなことから実行していく、もう一点は、敬老会の方たちとお花見に行った。そうすると日頃あまり出会っていない方たちも多くおり、大変喜ばれた。お花見に行ってきたという話を友達にすると、自治会に入ったら連れて行ってもらえるということで、二、三人の高齢者の方が自治会に加入したという事例もあった。隣

近所のお付き合い、特に災害時などに高齢者を守るという点では非常に大切であると思うので、やはり日頃からそういう交流の場を持つことが大切だと感じた。

○前田教授

そういうことの積み重ねが一番大事だと思う。

●篠原議員

いま新居浜市の小中学校は全てコミュニティ・スクールが導入され、中学生と地域の皆さんが協働活動を多く行っている。先日も花いっぱい運動を行ったが、中学生の皆さんは町を美しくしたいという気持ちで、多くの方が自主的に参加してくれた。大人になったとき、地域とのつながりを大切にできる市民を増やすためには、子供のときから自治会活動に参加するという機会を作ることが重要ではないかと思う。

まとめ

○前田教授

意見は尽きないが、この辺で終わりにしたいと思う。自治会は若い人から見ると何となくえたいの知れないもの、何をしたらいいのかよく分からない、大変なことを押し付けられるのではないかといったイメージを持っているというのがあると思う。そういうのを少し解きほぐしていかないと、皆さんの話を聞いて思った。ではどうしたらいいのかという話で、先ほど言われたように小さなことから、一緒に暮らすためにお互いが支え合う、助け合うと

いったことができるといった体験を重ねていくことが大事だということと、先ほどの、子供のころからのコミュニケーション、そういう人たちの力をどう使っていくのかといった話、そういう意味ではコミュニティ・スクールの考え方も本当に大事である。自治会に入ることの不安みたいなものをどういうふうに解消していくかということも大事な話だと思った。自治会のイメージを変えるような、従来とは違った形の自治会の在り方や活動の内容など、簡素化したり協力員制度をつくられたりしてすごく苦労されていると思うが、そういうものを取り入れて、新しい自治会に変わるといったことを発信しながら、漠然とした不安を解消させるようなことができればいいと思った。正解のない中でやっていかないといけないので大変かと思うが、自治会はいろんな意味で生活を支える基本だと思うので、ぜひ加入率の減少を止めるような形で皆さんが協力しながらできたらいいと思う。



経済建設委員会

日時 令和2年11月25日(水) 19時59分～19時59分

<第2部 商店街の活性化について >

【コーディネーター】愛媛大学社会連携推進機構：前田 眞 教授

【パネリスト】※敬称略

(経済建設委員会)

- ・大條 雅久議員(委員長)
- ・越智 克範議員(副委員長)
- ・近藤 司議員
- ・藤田 幸正議員
- ・高塚 広義議員
- ・田窪 秀道議員
- ・合田 晋一郎議員
- ・小野 志保議員

(新居浜商店街連盟)

- ・越智 俊博(会長)
- ・曾波 克年(副会長)
- ・藤田 友也

(新居浜登道南商店会)

- ・伊藤 俊一(会長)
- ・次井 孝美(会計)
- ・梅屋 サム

記録

●大條議員〈委員長趣旨説明〉



「商店が集まる街」から「生活を支える街」へ。これは、今年6月に国の「地域の持続可能な発展に向けた政策の在り方研究会」が取りまとめた中間報告のテーマである。地域コミュニティの再生や商店街の活性化はいずれも新居浜市の行政課題として長年うたわれてきており、この二つを複合して行政課題とする発案は、新しい政策につながるものであることから、地域コミュニティにおける商店街に期待される役割と行政の支援の在り方について、皆さんと議論を深めたい。新居浜市には上部地区、川東地区にも歴史的な商店街があるが、時間的にもその全てを呼ぶ余裕がないため、新しい試みに取り組まれている新居浜商店街連盟とその隣の新居浜登道南商店会の代表者に参加していただいた。銅夢にはいまが民間の産直市として来年の春のオープンに向けてスタートしようとしていることをこのフォーラムをご覧の市民の方々に知っていただき、またその内容を私たちも聞きたいと思う。また、新居浜登道南商店会は、夏には一宮神社のわごせに合わせた夜市、

冬には光のトンネルイルミネーションというイベントを続けられている。銅夢にはいまの今後と合わせて、商店街の悩みなどを共有して解決の知恵を探っていければと思う。

○前田教授

このテーマについて団体の皆さんから現状や意見についての発言をお願いする。

●越智会長（新居浜商店街連盟）

商店街の活性化と言われて私に関わるだけでも40数年、永遠のテーマみたいな形で取り組んできたが、いまだにうまくその活性化にこぎつけていないというのが現実の話である。平成26年に新居浜市と新居浜商工会議所、新居浜商店街連盟の三者でまちづくり協議会を設立し、中心商店街の活性化について検討を始め、まちづくり協議会の中では銅夢にはいまを中心にした2ヘクタールの開発計画を結論づけた。商店街連盟の会員も最後のチャンスという位置づけで真剣に取り組んでいるが、この開発計画には総事業費として200億円から300億円の投資が必要となり、現実の話にはなかなかない。しかし、この計画のどこからかでも動かさない限りは計画だけで終わってしまうため、手をつけやすく一番可能性のあることとして、なかなか認知されず利用頻度も下がっていた銅夢にはいまを有効活用できるような施設に変えるという結論に至った。そこから銅夢にはいまを1日の来店者数800人から1,000人の産直市場にという考えを持ち、にぎわいの創出や新

しい若い人たちの起業が起きる可能性にも期待をしながら、商店街や中心市街地の活性化につながっていくという考えの中でスタートさせ、産直市場が完成した暁には次のステップを踏んでいこうというような形で取り組んできた。10年ほど前には、3人の地域再生マネージャーに1年間通して商店街と中心市街地を見てもらい、新居浜の商店街はボーナス通り商店街で、呉服屋、時計・宝石店、高級ブティックだけが残っており、夏と冬のボーナスのときだけあればよく、毎日の生活には必要ないという厳しい指摘を受けた。時代の変遷の中で最寄品を扱う業者が抜け、特に食品を扱うところが全くないという状況が生まれてしまった。衣食住の中で、人間が生きていく上で一番必要な食をテーマにしたまちづくりをもう一度していかないことには市民が必要としてくれないのではないかというようなこともあり、食をテーマにした事業となっている。



○前田教授

今までの考え方が整理されたと思うが、産直市場をどうするのがこれからのテーマになると思う。新居浜登道南商店会の皆さんはいかがか。

●伊藤会長（新居浜登道南商店会）

登道南商店街は250メートルぐらいの距離で、先ほどのような大きな計画はないが、ここ数年は店を辞める人がいても、若い人が新しいお店を出してくれており、店舗数は大きく下がっていない状況である。しかし、空き店舗が一番大きな問題となっており、若い人が店を出したいと見に来たことは今まで何回もあったが、貸せる状態ではない状況である。調査してみると大家さんがある程度貸せるように改装工事をしないといけないという思い込みから、お金を出せないため貸せないということ、何年も前から断られているため、貸す意思がないとこちらで思い込んでおり、大家さんの連絡先も確認できていない状況になっており、貸す準備ができてない。もう一つは商店街のコミュニケーション不足で、商店街のみんなで集まる機会が少なすぎて、今回もコロナ関係の補助金などの情報交換が全くできていなくて、もらえていない店もあった。話し合ってみたら、自分が思っていた以上にコミュニケーションを取りながらみんなで協力していこうという店が多く、もう少し前向きにコミュニケーションが取れていたらみんなで協力して盛り上げようとする動きがもっと作れていたと感じた。

●次井会計（新居浜登道南商店会）

登道南商店街は別子銅山と口屋をつなぐ歴史的な街道であることにこだわり、夏の催しなどを続けている。会長を務めている伊藤さんが2011年に登道南商店街に来てか

らいろいろな活動もしやすくなっている。
また、2018年にはハチマル商店、2019年には焼き鳥の奏、現在改装中で12月1日に開店するひまちという店がある中で、伊藤さんを中心にこまめに各店舗とコミュニケーションを取っていることがいろんなことにつながっていくのではと思っている。

○前田教授

いろんなことを相談できる人がいると、思いを持った人たちの気持ちを引き出したり、実際に行動に結びつけたりすることができると思う。また、銅夢にはまに戻るが、こんな産直市場にしたらお客が来るというような、これからできる市場について話していただきたい。

●藤田さん（新居浜商店街連盟）

銅夢市場は貸しホールとして運営していた銅夢にはまを直売所という形で事業変更し、令和3年3月中旬のオープンを予定している。売場面積は約200坪、基本的には年中無休で、お客様が生鮮品や加工品、惣菜などを毎日買いに行けるような直売所としてあるべき姿でオープンしようと思っている。また、建屋の前を全面駐車場にして、駐車場のスペースはある程度広げていく。今後、問題になるのは、道の細さなどで、行きづらさや駐車場の有無はお客様の需要の大きな要因となるため、今後改善し、来やすい場所となるよう作っていかないといけないと思っている。次に具体的な品ぞろえであるが、さいさいきて屋や周ちゃん広場などの有名どころは、直売所と言いな

がらも生鮮三品をしっかりとそろえているところが大きい特徴である。直売所は、基本的には地元の農家で作った野菜や果物などの青果品がスタートであるが、世の中の直売所の流れは総合的に地元のいいものがそろっていることや鮮度がいいものがそろうことが大きなポイントになることから、銅夢市場の一番要になる生鮮三品は、ほかのスーパーなどに負けないような品ぞろえと鮮度、相対で買えるようなライブ感を目指すところである。相対でコミュニケーションをとる販売は、大手のスーパーなどでは失われてきており、私たちができるサービスとしてお客様に提供できる価値だと思っている。農家の野菜や果物がメインとなる青果、直売品と精肉、そして鮮魚の部分が三本柱で、今は核家族ということで一世帯あたり的人数かなり減っており、自宅で料理する機会がかなり減ってきていることを踏まえ、出来たての料理や惣菜が食べられる・買える場所として惣菜売場を設け、出来たてで家庭の味に近いというイメージで展開をしていきたい。最後にカフェに関しては、地場商品の野菜や肉、魚に触れ合える場所というイメージが強いことが大きなポイントになると思っている。全体で共通しているキーワードはストーリーである。新居浜産であることや農産物がどのようにして作られているのかなどの物語を作っていくのが、私たちの仕事だと思っている。地元でどんな野菜を作っているのか、どういうこだわりをもって作っているのか、こ

ういう料理にしたらおいしいとか、農家が自ら店頭で販売していくとか、一つ一つの商品にストーリーを設けていくと、お客様がより楽しくなるお店になると思う。加工品や一般食料品も同じで、地元業者がどのように作っているのかは意外と知らないで、商品のストーリーをしっかりと伝えて商品の価値を高め、商品を使ってもらい、感動してもらって、もう一度買ってもらうという流れを作っていきたいと考えている。

○前田教授

何か付け加えることはあるか。

●曾波副会長（新居浜商店街連盟）

十数年かかりこの銅夢にはまを銅夢市場としてオープンさせていただけるようになったことを感謝している。これからも商店街連盟を含め、みんなで盛り上げていこうと思っている。ここから少しお願いになるが、この銅夢市場をオープンさせることで終わりではなくて、商店が集まる街から生活を支える街、住みやすい町、住みたい町というのにこの銅夢市場をつなげていき、銅夢市場の周りの商店街も含めて、みんなが住みたい町になるようにスタートを切りたいと思っている。そのスタートを切るにあたり、この銅夢市場がシンボルだと思っているが、我々だけで元気づけていくには力の限界があると思うので、これからも行政、市議会議員、皆さんと一緒に考えて、十年後二十年後に銅夢市場を作ったのは正解だったと一緒に言えるように共に行動していただきたいと思う。これで終わりでは

ないことを強くお願いしておきたい。

○前田教授

梅屋さん、付け加えることはあるか。

●梅屋さん（新居浜登道南商店会）

この話が来たときからすごく考えるようになった。私たちの意見を聞いていただくことも続けてもらいたいと思うが、自分自身が関わって思うことは、国の政策などをいち早く知っている市議会議員の方が、商店街を育てるという意識で私たちと関わっていただくと、そういうことは知らなかったとか、こういう考え方もあるという観点から商店街を見ていくことができるのではないかと思う。

○前田教授

これから市ともいろいろな関わり方ができればいい。今の話を聞いて、感想も含めて、こんなことが応援できたらという話があると思うがいかがか。

●田窪議員

銅夢にはまのレイアウトを見せていただき、生鮮野菜などを売ることだが、市内にあるマルヨシセンターやマルナカ、ビッグなどの商品と差別化をしないと新居浜の人は1回は行っても2回目は近くで買うような気がする。また、伊藤さんが言われた大家が貸し渋るような空き店舗は昭和通りや登道南商店街も含めて商店街で活用できるものが何店舗ぐらいあるのか。また、商店街連盟の会長さんや新居浜市が保証人になるのであれば貸してくれるところが何店舗あるのだろうか。新居浜市では創

業支援として、男性であれば30万円、女性起業家であれば50万円、転入者であれば100万円の補助がもらえる。移住者支援でも県外市外から帰ってきたときに住宅の建築や改修などの補助もあるが、商店街の空き店舗を活用して店を出そうとしたときには補助的なものが少ないため、私たちも起業しようとする人に手厚く支援ができるように考えたら、もっと活性化できると感じた。



○前田教授

何を助けていけばいいのかということである。

●近藤議員

令和元年で約28%が空き店舗であると聞いている。大家が空き店舗を改修し、貸しても元が取れないと言われたが、中小企業振興条例の補助メニューを使えばできるようなこともあるが、新居浜市の場合は商店街に対するメニューが少ないと思っているので、新しいメニューを作ることも一緒に行政に働きかけていきたいと思う。もう一点は、リーダーとなる人材の発掘や育成は大事だと思うことから、別子山と大島で活用している地域おこし協力隊を商店街で活用するのもいいと思うため、行政に相談してみようと思う。

●合田議員

商店街を育てるという中では、今の制度が十分かどうかの検証も必要ではあるが、地元の起業支援につながるような改修費用などの補助も充実させていくことが私たち議員が考えていくことだと思うため、実情を把握しながら考えていきたい。もう一点が、もともとイベントなどでにぎわいを創出しようとしていた銅夢にはまが、イベントの集客ではなく、地元の方に喜ばれ、年中使えるような施設として考えられていることは、地元の方も楽しめ、人が集まる施設になると思うのでとても楽しみにしている。会長が2ヘクタールの計画でスタートと言われていたかと思うが、その中で私案にはなるが、魅力を高めていくために、昭和通りを一方通行にして車が入りやすくし、沿線もコミュニティ道路として、車が止められたり、ベンチで安らげるようなところを作る、また、銅夢にはまの前の広場がなくなることから、登道に人が集えるような芝生のある公園を作ればいいと考えている。自然に人が集まる中心が銅夢市場になると思っているため、みんなで夢を語り合えたらいいと思う。

○前田教授

ほかにはいかがか。

●高塚議員

皆さんの意見や要望を聞いて、長年のまちづくりに対する思いや苦労を理解したところである。産直市場のオープンを機に商店街同士がまちづくりに対するストーリー

性や思いなどを協議する場を、事あるごとにつくれば、方向性も決まり、具体的な行動に及ぶと思う。登道南商店会が何らかの形で事業にコラボすることで、ストーリー性を持たせて付加価値をつけ、ここに行けば半日楽しめる、また来てみたいという思いになるように、行政の住民に対するアンケートや、また商店街も生の声を聞いていくところから、明確に見えてくるものがあると思うため、市議会もしっかりと応援をしていきたいと思っている。

●小野議員

先ほども会長からの話にあった最後のチャンス、真剣に、覚悟を決めた決断ということで、私自身も銅夢市場にはかなり期待している。銅夢市場の外にもストーリーはあるので、銅夢市場で買い物をしてすぐ帰るということでもいけないと思う。また、空き店舗への補助金が少ないということ、また伊藤さん自身が大家さんと交渉していると聞いたが、例えばコーディネーターや地域おこし協力隊など、お店の負担にならないように、行政側もうまくパイプ役になれるような形でできたらいいと思う。また、銅夢にいまはまに行くまでの交通網についても市で確保ができたらいいいと思っている。空き店舗については、市民団体や福祉団体、またコミュニティーを持っている方々などへの家賃補助なども必要と思う。このスタート地点が銅夢市場で、周りへの波及効果も必ずあるはずなので、行政、市議会議員としても何とかフォローしていきたい。

●越智議員

ショッピングというのは、本来わくわく感がないとだめだと思う。私が子供の頃は、昭和通りに行くと、どういうお店がどういうものを売っているのかと楽しかった。今でも、そのわくわく感で買い物することが結構ある。銅夢市場がそのわくわく感を担っていけるかどうか。新聞に銅夢市場の商店の案内が出ていたが、銅夢市場がどんなところで、いつオープンするのか、市民の皆さんはよく知らないと思う。委員長が話した登道南商店会のリーフレットも今まであまり見たことがない。

●次井会計（新居浜登道南商店会）

夏は十何年もしており、その都度リーフレットを作っている。12月1日にオープンするお店の方の住まいは船木であるが、このようなことをしていることは知らなかったと言われ、まだまだ広がっていないのだと実感した。

●越智議員

私が言いたいのはまさにそれで、銅夢市場も含めて、市民にまず知ってもらわないといけない。スーパーなどは、チラシもよく入れ、新しいことや商品などの宣伝をしているが、昭和通りの商店街のチラシはあまり見たことがない。私は、銅夢市場を一つのきっかけとして、わくわく感のある新しいまちづくりの核にするのであれば、若い人たちにももっとはっきりとしたイメージがわかるような宣伝が必要だと思う。銅夢市場ができれば、登道南商店街とも連携

ができてくると思う。どのような銅夢市場を作っていくのかをもっとアピールしてくれたら、私たちもアピールしやすい。

●藤田議員

この辺は特に食品を扱うお店が非常に少ない中で、銅夢にはいまを市場として改装することになってよかった。直販所になれば、地元産品も含め、商品がそろわないとお客は集まらない。魚にしろ、野菜にしろ、生鮮品は地元にもあることから、うまく働きかけて、多くの方に出品をしてもらい、直販所の魅力である生産者の顔が見えることについても十分にバックアップしていかないといけない。特に新居浜は農業が弱く、多品目栽培がなかなかできない中で、生産指導などについても皆さんや関係組織、議会などが働きかけていくことが非常に大事だと思う。そのようなことによって、商品が集まり、またそこに人が集まる。そして、登道南商店街への人の流れとなり、会長が言われた2ヘクタール計画に発展していくと思う。空き店舗への補助についても、皆さんと一緒に行政機関へ働きかけていくと、住みやすい町、住んでよかった町になってくると思う。

○前田教授

今話を聞いて、商店街の皆さんから話はあるか。

●伊藤会長（新居浜登道南商店会）

片一方は何億円という事業をしているが、登道南商店街はあと何軒か少なくなると商店街費が払えない、街路灯の電気代も払えないというところまでになっている。現実

問題として創業したい若い人がたくさんおり、一番チャレンジしやすい場所が商店街だと思う。大きいお金は要らないので、空き店舗を使えるように考えてもらいたい。



●次井会計（新居浜登道南商店会）

香川銀行が12月に新店舗に移転する。また、登り道で二十三、四年近く営業したヒット焼き屋が、息子の代になり、楠中央通りに以前あった黒猫のパン屋のところに移転することが決まっている。それはとてもよい事なのだが、そんな空き店舗のこともなんとかお願いしたい。

●伊藤会長（新居浜登道南商店会）

空き店舗については、もし可能であれば行政も一緒になって大家を探してみることに力を入れてもらえたらだいぶ変わるように思う。

○前田教授

越智会長も一言あるか。

●越智会長（新居浜商店街連盟）

昭和通りと登り道サンロード辺りの商店街の空き店舗に関しては、建物の老朽化により、店舗にするためには建て直したほうが早いという店舗が多いため、ほとんど使えない。そのため、老朽化した店舗のほとんどは壊され、端からだんだんと住宅になっている。これは、私が話した2ヘクター

ルの計画で魅力あるまちづくりができれば、端から住宅ができて、町中人口が増えることから、消費が生まれ、最寄りの商店街を利用してもらえるため、歓迎できる。しかし、これがあまりにもひどくなってくると、全てが住宅に変わるというような危惧もあるため、まちづくり条例みたいなものの中で、この2ヘクタールの界限は住宅の建設はさせないというぐらいのものを作り上げないといけない。民間の勝手な投資の中で、一番簡単なのが住宅であるため、不動産業界はそのように捉えてくると思う。昔は商業地で地代や家賃もかなり高く、出店するのもなかなか難しかったが、今は土地も安くなり、家賃が10万円もしないところがたくさんある代わりに、改装費に何百万円もかかるというのが現実で、出店がなかなかしにくいところが正直なところである。それと銅夢にいほまを産直市場にすることは、商店街の活性化の目的ではなく、活性化するための手段である。国との話し合いの中でも言ってきたことだが、基本的には商店街の各商店がいかに潤い、活性化できるかが一番大事なところで、銅夢市場からどのようにつなげていくのかというところを、いろいろ案を出しながら、考えている最中である。越智議員からもっとPRしなさいという話があったが、PRの前にやらなければならないことが山ほどあり、全てを煮詰めた上でPRをしていきたいと考えている。銅夢市場が成功したから、商店街の活性化につながるわけではないため、

店側から銅夢市場へ、銅夢市場から店側へというネットワークの中で、どうつなげていくのかを知恵を絞って取り組んでいる。銅夢市場に関しては差別化の意味も含めて、雑貨感覚の店づくりと全国のいろいろなブランド商品を展開していきたいということも考えている。全国で約80箇所の商店街のネットワークがあり、北海道から沖縄まで、その土地ごとの旬の食材が市場を通さずに私たちのところへ直接入ってくる。今回も群馬県の水戸から幻のりんごといわれているぐんま名月を販売したら、予約だけで100個や200個すぐに売れる。間違いない商品を提供していくことを肝に銘じて運営していかなければならないことだけは、今言えることである。

まとめ

○前田教授

熱心な議論で時間超過してしまったが、少し簡単なまとめをして終わりたいと思う。商店街を育ててほしいという話があったが、どうすれば商店街が育っていくのかという話があると思う。人材育成の支援があればいいのか、相談役みたいな人がいればいいのか、あるいは行政とのパイプ役となる人がいればいいのか、そのような人たちを育てていくのがいいのか、などがあると思うが、育てて欲しいものの中身は何なのかということを確認に見える化することで支援を受けやすくするということがあると思う。また、銅夢にいほまについては、拠点とし

てしっかり機能させることが大事だと思う。そのためには何が必要なのか。そこへの来やすさみたいなものがあるのかとか、お店の努力以外にも環境が整わないといけない部分があるのか、そのような環境をどのように整えていくのか、将来のことについては用途規制みたいなもので、商業の拠点として機能するような在り方を考えていけたらいいという話があったと思う。そのような視点から見たときに、銅夢にはまにはどのようなサポートがあれば、しっかりとした拠点として波及効果も生み出すことができるのかという話だと思う。登道南商店街にとっては、新規店舗がチャレンジしやすいなどの特徴があると思う。その特徴をどう生かすかを考えて、そのような意味での商店街を育てる発想みたいなものが出てきたらいい。大家への対策や資金援助なども含めて、空き店舗が何とか使えるようになれば、新しい人たちが入ってくる可能性はあるという感じはあったため、特徴を生かしていくための環境整備みたいなことをみんなで一緒に話し合っていてほしい。銅夢にはまが拠点化していき、登道南商店街が活性化していったら初めて連携の話が出てくると思う。いきなり連携するのではなくてお互いが少し自立できる中で連携という話が出てくると思うため、そこを目指してやっていくことが必要だと思う。商店街は生活を支える役割を持っていると思うので、なくしてはいけないし、育てていかないといけない文化だと思うため、是

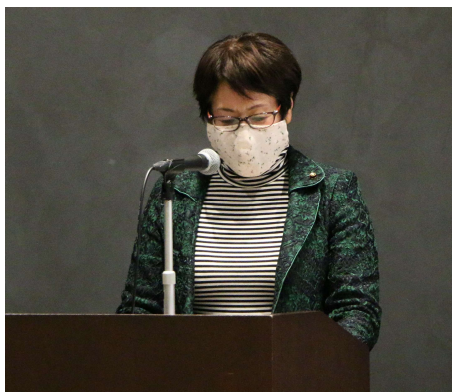
非みんなと一緒に考えて活性化の道を探ればいいということを私のまとめにさせていただきたいと思う。



■閉会挨拶 市議会副議長 田窪 秀道



日時 令和2年11月26日(木) 18時55分～20時06分



■司会 市議会議員 伊藤 優子

■開会挨拶 市議会議長 永易 英寿

<移住者から見た新居浜の魅力について>

【コーディネーター】愛媛大学社会連携推進機構：前田 眞 教授

【パネリスト】※敬称略

(企画教育委員会)

- ・藤田 誠一議員 (委員長)
- ・伊藤 嘉秀議員 (副委員長)
- ・仙波 憲一議員
- ・藤田 豊治議員
- ・伊藤 謙司議員
- ・井谷 幸恵議員
- ・米谷 和之議員
- ・神野 恭多議員
- ・黒田 真徳議員

(きてきてにいはま+)

- ・柳川 あこ
- ・徳永 壘
- ・佐藤 翔太
- ・山本 友紀
- ・高須賀天真

記録

●藤田誠一議員〈委員長趣旨説明〉

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、個々の働き方や暮らし方に大きな変容が見られる状況になっている。テレワークの広がりなど、急速に多様化した社会の変化を移住定住人口の増加を図る機会と捉え、積極的な移住定住の推進が効果的な時期と考える。今回、移住者をはじめとする外からの視点に基づく新居浜の魅力を話し合う中から、新たな気づきを得て、移住者の増加につながる取組を考えたいと思う。



○前田教授

このテーマについて最初に団体の皆さんから今こういうことを考えている、こういうことに困っている、あるいは新居浜の魅力等も含めて言っていただければと思う。

●柳川さん（きてきてにいはま+）

出身は奈良だが、2016年に大阪から新居浜に移住してきた。まさに移住者側の視点という感じだが、今私はほぼリモートワークで仕事をしている。新居浜市内の企業が半分ぐらいで、もう半分は東京や大阪と実際に会わずにテレビ会議やチャット等を使って仕事をしている。新居浜に全然知り合いもない状態で移住してきたので、最初は全く仕事も取れず、もう5年前ぐらいからずっとテレワークみたいな感じでやって

きた。新居浜のいいところなのだが、人と人の紹介やつながりなどプラスの意味でいつながりがあるので、最近になってやっと紹介で仕事の依頼がくるようになり、今はどんどん仕事が来ている状況になっている。東京や大阪だとライバルが乱立している状態だが、新居浜はまだまだこれからという感じであるため、私はすごく魅力に感じている。

○前田教授

人づてに仕事が広がっていくという感じかと思うが、それはほかの町ではあまりないことなのか。

●柳川さん（きてきてにいはま+）

東京とかだとどれだけ信頼を得ていたとしても数字主義というか、売上主義みたいなところはあった。人と人のつながりはとても魅力であると思う。

○前田教授

自分の人柄を見てもらえるということか。

●柳川さん（きてきてにいはま+）

そうである。頑張りたいと言えば仕事する上でも生活する上でも応援してもらえる。

○前田教授

周りの人が優しい。徳永さんはいかがか。

●徳永さん（きてきてにいはま+）

私は生まれも育ちも新居浜で、一旦就職で東京に出て会社員をしていたのだが、そこから会社を一旦退職してワーキングホリデーという制度を使って海外に行き、2018年にUターンしてきた。新居浜に戻ってきてちょうど2年ぐらい経ったところである。新居浜のことは分かっていたつもりだったが、十三、四年くらい新居浜から離れていたため、帰ってきたらなくなっているお店や会社があったりした。記憶が高校生でス

トップしてしまっていたのでUターンして仕事を自分でしていきたいとなった時に、柳川さんが言うように人脈作りから始まったというところもあり、今はデザイン業や飲食店でバイトに入ったりするなどフリーな感じで仕事をしている。やはり人のつながりが魅力というのもあるが、松山等と比べるとまだまだ足りない部分もあり、新しいお店や新しい仕事のスタイルのようなものもまだこれからである。リモートワークをやっている人もたくさんいるという気づきもあったが、いい意味でちょっと中途半端なところもあるからこそ挑戦しやすいというのは、帰ってきて思った。それまでは何もない結構つまらない所というのが私の若い頃のイメージだったが、やろうと思ったらできる、知ろうと思ったら自分から情報を取りに行けば結構情報があるというのは帰ってきて、大人になってから気づいた点である。

○前田教授

自分から動くといろんなものが手に入る。周りとの距離感が近いというイメージか。

●徳永さん（きてきてにいはま+）

近い。私も都会に住んでいたが、都会はいい意味で他人には干渉しないからそれが心地いい部分もあると思うが、田舎に来るとその距離感が近くなってそれがいい場合もあるし、近過ぎる場合もあると思うが、近いというのは一つの魅力であるとも思う。

○前田教授

うっとうしさと心地よさがある意味共存しているという感じか。

●徳永さん（きてきてにいはま+）

それはすごく感じている。東京だと知り

合いが増えても、浅く広くだが、こちらは狭く深くなりやすい。

○前田教授

深くなると安心感が強くなるということか。

●徳永さん（きてきてにいはま+）

安心感もある。でもたまにうっとうしいというところはあるかもしれない。

●佐藤さん（きてきてにいはま+）

昨年金沢市からUターンして新居浜に6年ぶりぐらいに帰ってきた。それまではずっと県外で働いていたが、金沢市では創業間もないベンチャー企業で働いて日々タバタと泥臭いことをやっていた。新居浜に帰ってきて僕の中で不安に感じたのが、仕事面において成長できるかどうかということである。キャリア的に成長できるかどうか、どうすれば学べるのか、またどういった職があるのかというのが一番不安要素だった。見えない部分も多くあり、新居浜の業態としては第二次産業が多いので少しそこからずれている部分は不安だった。今はサッカークラブの運営や地域イベントの企画や制作、運営をしているが、さっき徳永さんが言われたように、意外と誰もやっていない領域だったり、やっていない部分が多いのでそういった部分を考えたら、クオリティーや品質はさておき、やればできるというのはすごく感じている。僕がやっているようなことは東京とかだと多分ほかにも多くされているので別に大したことはないが、言わば、ないので作れるよさがあるというかもっと格好つけて言えば先駆者になるみたいなのは地方に行けば行くほどあるのではないかと帰ってきて1年過ごして感じている。

○前田教授

すぐトップランナーになれる、頑張れば
トップランナーになれる環境ということ。

●佐藤さん（きてきてにいはま+）

僕しかやっていない、というか誰もいな
いから。

○前田教授

成長や学びの機会やチャンスというのは、
金沢と比べると多いイメージか、それとも
やはり金沢の方があったと感じるか。

●佐藤さん（きてきてにいはま+）

難しい質問だが、個人の受け取り方によ
ると思う。さっき言ったように周りがやっ
ていないからやりやすいというパターンと
周りがやっていないからそれを理解されな
いという側面もあることを考えると、考え
方次第であると思う。やはり都市部や栄え
ている町に行けば行くほど多種多様な考え
方とか価値観があるため、それを踏まえ
たらスタートはしやすい。けれども、その
後に飛び抜けないと埋もれてしまうという
側面もあるかと思う。



○前田教授

そういう面では、パイオニアというのは
大変で、切り開いていかないといけないが、
やればすごく達成感もあるし、自分に跳ね
返ってくるものも多いというイメージか。

●佐藤さん（きてきてにいはま+）

そういうイメージである。

○前田教授

相当前だが、僕も広島からこちらに帰っ
てきて、町づくり系の仕事はあまりなくて、
自分で開拓しながらやってきたという経験
があるが、その時も同じようなことを感じ
た。仕事を説明できない、周りの人に理解
してもらえないというようなところがあっ
たりする。

●山本さん（きてきてにいはま+）

私はIターンでの移住である。京都市出
身で大阪の大学に通ってから就職で新居浜
に来た。新居浜とは縁もゆかりもないがや
りたい仕事があったから新居浜に来たわけ
だが、きっかけとしては、新居浜出身の人
が大阪にいてその人がフリーペーパーを制
作する会社に求人が出ているというので私
がその会社に電話をかけて面接を申し込み、
採用してもらえたので新居浜に来た。私に
とって初めての一人暮らしであり、京都か
ら四国に行くということもあり、かなり心
配もされた。仕事をやりたいから来たのだ
が、新居浜の魅力としては、私がサークル
に飛び込みで入って、年代は上の方々だっ
たが、皆さん優しくしてくれ、魚が釣れた
からいるかとか、車で困っているならちょ
っと貸そうかとか、すごくみなさん暖かか
った。本当に助かったし、今もそのサーク
ルの方々や会社の先輩方に支えられて生活
をしている。

○前田教授

何かいい意味でのおせっかいがあるのか
なと思う。

●山本さん（きてきてにいはま+）

ちょっと困っていると言うと、それなら
ば、とすぐ言ってもらえる。

○前田教授

そういうのが人によっては煩わしいと思う人もいるし、それがあって助かる人もいる。そこは受け止め方の問題であるかと思う。

●山本さん（きてきてにいはま+）

私としてはサークルは週に1回、2回ぐらいしかないので距離感もかなりいい。毎日毎日付き合ってるわけでもないのそういう意味でもすごくいい距離感である。

○前田教授

では高校生の高須賀さん。

●高須賀さん（きてきてにいはま+）

僕はずっと新居浜で生活していて、まだ外からの視点はないが、部活動でガイドなどを今までしてきた中で転入者の方々を対象にしたツアーを行ってきた。その方々とお話をするとう新居浜市に来る前はどんな町なのか分からない不安などがあったが来てみたら大型のショッピングモールがあり病院もあるし、子供を預けられる場所もあり、とても生活がしやすいと言っていた。生活してみれば、なかなか不便はないということに気づいたということも多くの方が言われていた。そのツアーの後高校で話し合ったが、やはり新居浜は良くも悪くも生活する上で平均的な町と言うか、特に目に見えて課題というものはないが飛び抜けてここがいいという部分もない、住んでみたらわかる町で売り出すのもありかと思うが、それはなかなか賭けになるかと思う。住んでみないとわからないということが強みでもあるし、弱みでもあるんじゃないかと感じた。一度新居浜市から出て、また戻ってきたという方もツアーの中において、結婚して子育てがしやすいから新居浜に来たという

方もいて、住んでみればその住みやすさが分かる状態であると感じた。

○前田教授

先ほど平均的な町と言われたがそれに対して物足りないと感じるか。

●高須賀さん（きてきてにいはま+）

物足りないと感じる。よく思うのは、待機児童ゼロ、そして子供を預けられる場所もある、病院もたくさんあるという風に大人になれば住みやすさ、暮らしやすさが痛感できるかと思うが、僕らのような高校生世代からすると、仕方がない事ではあるが、大学がないため出ていきたいと思う人が多い。生活のしやすさを若者目線から見ても強く感じられるのであればそこがまた強みの一つになるのではないかと感じる。

○前田教授

卒業すると、出て行くのが当たり前なのか。

●高須賀さん（きてきてにいはま+）

僕の学校は就職と進学が半分ずつくらいであるので、出ていく人が半分、残る人が半分という感じであるが、進学校の友人に聞くとほとんどの人が市外に出て行くようであるので、就職を考えない人は出て行くのが当たり前と考えていると感じる。

○前田教授

よさがあっても気が付かないまま出て行ってしまふ。もう少し成長するとその辺のよさがわかってくるという感じ。

よさも含めていろいろな意見が出たが、今度は議会側に感想も含めてお話を聞かせていただきたい。

●伊藤議員

佐藤さんに何うが、先程都会では普通のことだが、新居浜に来ると新しいと言われ

た事業は一体どのようなことをされているのか。



○佐藤さん（きてきてにいほま+）

サッカークラブ、といっても社会人のサッカークラブで、皆さんサッカークラブと言うとJリーグとかプロのリーグを想像されると思うが、社会人の地域のクラブで、Jリーグの下のカテゴリの地域リーグというのがあり、そのクラブの運営をしている。こういった社会人チームは選手と監督しかいないというのが多く、特に地方に行けば行くほど顕著である。クラブのスタッフがいたりとか、イベントを企画して大会を主催するというのは、プロじゃないクラブで行っているのは日本全国を見てもほとんどない。あっても、関東や関西の都市部でスポンサーが付いているようなところであるので、そういった意味ではそこに行けば理解はされるのだが、この辺では草サッカーと何が違うのかと尋ねられる。イメージ的にはJクラブに近いようなことをやっている。

●伊藤議員

それは選手をJリーグに上げるとか、プロになるためにサポートしているという話か。

●佐藤さん（きてきてにいほま+）

それもよく聞かれるが、僕らのクラブは

少し意味合いが違っており、プロは目指しておらず、Jも目指していない。僕らの目指しているところは新居浜など地域で実際に働きながら自分の趣味やサッカーを生活の中にちゃんと溶け込ませていきたい人が生きがいや仕事以外の住みやすい要素の一つとしてこのサッカークラブがあればいいという価値観のもとやっている。だから勝ちへのこだわりも当然あるが、プロを目指すのではなく、極端に言ったら新居浜に来たらサッカーができるみたいなどころまで持っていきたいと思っている。

○前田教授

それは仕事としてやっているのか。趣味としてやっているのか。

●佐藤さん（きてきてにいほま+）

お金が出ているので仕事に近い。

○前田教授

そういう仕事があるのか。

●佐藤さん（きてきてにいほま+）

なかったから自分で作ったというのが正しい。

●仙波議員

移住するきっかけが多いほど移住者が増えるのではないかと僕は単純に思っている。こういうものがあればいいとか、こういうところが新居浜のいいところであるとか、やはりプラスマイナスを知りたい。例えばほかの町にはなくて新居浜にこんないものがあつたというのがあれば聞きたい。

●徳永さん（きてきてにいほま+）

新居浜市の位置がとてもいいと思っている。四国の真ん中であって、高松市も高知市も高速道路で1時間30分で行ける、松山市は高速道路で1時間、下道でも1時間40分で行ける、徳島も1時間30分くらいで行

ける。これは大人になって、車に乗るようになって気づいたことである。小さい頃や高校生の頃には全部遠いと思っていたが、ここから全ての都市にアクセスがいいというのはすごく感じており、橋もあるので岡山にも広島にも行けること等アクセスがいいという魅力もある。

○前田教授

それは、仕事をしている時か。それ以外の時か。

●徳永さん（きてきてにいはま+）

仕事をやっている時よりは、レジャーの際である。

●柳川さん（きてきてにいはま+）

最近の話であるが、仕事面でも非常に強みがあると感じた。広島から新居浜に移住して来たお客様がいるが、なぜ来たのかと尋ねたところ、四国を攻めたい、高知などに支店を出したい、高松と松山には既に店がある、そのような状況で新居浜市を選んだと。なぜかというところ、車で松山や高松の支店にも行くことができ、そのうち高知にも支店を出して仕事を拡大していくには新居浜がいいということだった。高知を攻めたいのであれば四国中央市の方が近いのではないかと思質問したところ、高知だけを攻めるのではなく四国全域に仕事を広げる場合には新居浜なのだという答えだった。そうすれば広島や岡山にも帰れるということ言われていた。レジャーでは週末にうどんを日帰りで食べに行ったりできるというよさがある。

○前田教授

そういうよさがあるということ。

●藤田豊治議員

移住者から見た新居浜の魅力の中で、息

抜きやレジャーとかができるような場所で、例えば新居浜にはこんな魅力的なものがあるよとか、ないのであればこういうものを作ってほしいとかいう要望があれば聞きたい。

○前田教授

サポートなどもこういうのができればいいというのがあれば。いかがか。

●徳永さん（きてきてにいはま+）

結構現状で満足しているが、若者目線での遊園地などのレジャー施設が欲しいとかというのではないというのがこのチームの意見である。

黒島海浜公園もあるし、山根公園もあるし、余暇を楽しむ場合にすごく遠方に行かなくても市内で割とできているというところはある。

●柳川さん（きてきてにいはま+）

以前は新居浜から大阪にフェリーが出ていたと思うが、大阪に出たいと思う時に東予港までバスで行く必要があるのがすごく不便だと思う。フェリーがあれば、若者たちも週末にフェリーで大阪に行って、また帰ってくるというようなことも考えられる。関西圏と新居浜のアクセスが非常によくなるのでぜひ船が復活すればいいと考えている。

○前田教授

使う人がたくさんいたらなくなってなかったかもしれない。他にもこんなのがあればいいとかはないか。

●山本さん（きてきてにいはま+）

私はいい意味で新居浜市は大人の町だと思っている。10代、20代が楽しむために公園にはなかなか行かない。そうすると、松山市などの繁華街が目立ってくる。その中

で何が欲しいかというより、高校生はまずバイトがしたいのではないかと思う。お金がないので。新居浜の高校は非常に厳しく、バイトができない。お金がないから何もできず、自分たちで楽しみを探そうということになると思う。私がいたところも基本的にはアルバイト禁止だったが、申請書を出せば学校に認めてもらえて、どこで働くか、週何回働くか、22 時以後は働かないという申請書を書いて認めてもらえたら働けるというシステムだった。そういう感じで緩くしていてもいいのかと思う。高校生が働くことで飲食店も活性化すると思うし、高校生がお金を持つと 20 代向けの低価格でコスパのいい店が増えると思うのでいいと思う。



●佐藤さん（きてきてにいはま+）

先日飲食店の人たちと話をしたが、飲食店側は人を欲しがっており、また、働いてお小遣い稼ぎをしたいという高校生もいる。高校の新卒で就職する子が多いと個人的には思っているが、多少なり働いてお金をもらおうというような経験や、上の世代から怒られる経験を 17 歳、18 歳の段階で就職する前に少しでもしておくとな卒で入る際のミスマッチがいくらか緩和されるのではないかと思う。何人かの経営者の方に聞いてもこの意見は結構聞こえてくるので、新卒の

子たちが、こういうはずじゃなかった、こういう仕事はしたくなかったというのを少しでも減らせる可能性があるのであればアルバイトを多少緩和して認めてもよいのではないかと個人的には思っている。

●高須賀さん（きてきてにいはま+）

高校生の目線から言うと、やはりバイトはしたい。佐藤さんが言われたように、僕の学校であれば半分は就職するが、やはり社会経験が欲しいという意見をよく聞く。急に社会に放り出されるよりも先にちょっとでもいいので働いて、お金の価値を知りたいとか、職場の人たちと関係をつなぐ方法を知りたいとか、そういう声が多く聞こえるし、何よりも高校生はお金がない。うちの学校はバイトは禁止であったが、今年度からは夏休みと冬休みの長期休み中はしてもいいと少しだけ緩和してくれた。そうやってしてくれないと高校生が自分を抑えられないということころもあり、自分勝手なところもあり、そんな状態で社会に出せるのかということころもあるのだが、やはり社会経験をしたいという気持ちは強くあるので、その辺をもう少しできたらと思う。

○前田教授

そのあたりは他の皆さんはどうか。軽々しくは言えないと思うが。

●仙波議員

私たちの世代は、違反とかもなかった時代であるので、なんとなく感覚がつかめないが、私はガソリンスタンドでアルバイトをして、先生もガソリンを入れに来たりしていた。社会経験を早く積むという、形を変えれば今インターンシップというようなことをやっているが、そういう中でも高校生ができる仕事というものもあると思う。特

に今新居浜の求人率は愛媛県内でもいい方なので。ただ、松山と違って観光地ではないからアルバイトの種類は限られると思う。そのあたりもまたいろいろな形で我々も話をしてみたいと思う。

○前田教授

キャリア形成やインターンシップの取り組みは今いろいろなところで模索をされている。そういうような環境があるということが移住者を増やすことにつながるのかということを考えたときに、市外から新居浜の高校に通いたいというような子供たちも増えてくるかもしれない。そういう環境を用意し、やはり無防備ではいけないので適切なルールの中でやっていけるようなものを考えてもいいのではないかと思う。

これは若い移住者からの提案としてそういうようなこともあったらよいという意見として。

●神野議員

貴重な意見ありがとうございます。僕は高校のときは打ちっぱなし場が終わった後に球拾いをしていた。これは学校に内緒だった。まず高須賀さんには、南高の半分が進学して半分が就職して残る方、残らない方いるが、個人的な意見としてはどんどん外に出て行ってほしいと思っているので、出ていくことが悪みたいにはぜひ感じないでほしいと思っている。こういった若いグループ、今移住者は一般的に20代から40代とすごく若くなったと言われているが、移住者がこういうネットワークを作っているのはすごいと正直感じており、そういうところでセレンディピティ、偶然の幸運みたいなものが生まれて、新しいことにつながっていくのだと思う。この真ん中に

行政が入ると絶対面白いものがないと思う。皆さんのグループに対して行政がどう関われるのか、何かあれば教えてほしいと思う。



○前田教授

言いにくいかもしれないが頑張って言うだけでいいからと思う。あまりいらぬお世話を焼くなという感じか。特にそういうのがなくても、今はやりたいことがやれているので大丈夫というイメージか。

●徳永さん（きてきてにいほま+）

サポートはあるに越したことはないと思うが、私たちみたいに割と外に出て行ったり、イベントに参加したりするのが好きな人達と、行政の人達がどうやったら何か一緒にできるのか。どこにどう働きかけたらいいのかがわからないので、その架け橋になってくれる人、窓口があればと思う。思いついたことがポンと言えるところはあるのか。

●仙波議員

行政自体のシステムが、皆さんから見たらわかりにくいという部分があるのだと思う。新規に仕事をするということであれば、経済関係の部署に行けば話を聞くし、情報も持っている。ただ、一番難しいのは聞きに行くタイミングである。例えば今行政が市政だよりを出しているが、それ以外にもホームページも含めて情報を出しているが、行政が書いているとどうしても固くてなか

なか読みにくい。行政の情報の出し方はま
ずいと感じている。

●佐藤さん（きてきてにいはま+）

今徳永さんがおっしゃったように、柳川
さんがやられているような新居浜びずはそ
ういったハブ的な役割を果たしていると思
っていて、それをまず行政がやってほしか
ったと思う。新居浜にあったらいいもの
について今思ったのは、僕が金沢市に住ん
だ時に、古民家の改装をしたりする宿泊
事業のベンチャーで働いていたのだが、そ
ういった背景もあって、新居浜に歴史的背
景のある建物や住友関係の建物があると思
うが、そういったものを活用した空間やス
ペース運用みたいなものがあまり見られな
いと個人的には感じており、例えば星越の
山田住宅なども最近新居浜市に寄贈され
たと思うが、そういった部分で行政側から
何かをとるのであればそういうものを民間
に案を募集するような動きがあって、住友
や新居浜市と民間が三位一体となって空間
を作るというのがあってもいいのではない
かと思った。例えば新居浜に現在ある宿泊
施設というのは大手やチェーンが多いと思
うので、新居浜にしかないものや新居浜の
魅力という観点から考えると、折角山田住
宅が行政に移管されたのであれば、行政と
してしっかりと活用していくのがいいと思
う。

○前田教授

その辺のコラボレーションというか行政
と一緒にやってできるような窓口があ
るといいと思う。そういう市民活動も含
めて新居浜には協働オフィスというもの
がある。そういうところに相談に行く形が
できると、そこが窓口になって必要な課につ

ないでくれるというような仕組みは恐らく
ある。顔が見える関係でないとなかなか行
きにくいのか。

●柳川さん（きてきてにいはま+）

何か違うかなという感じで行っていない。
もちろんコワーキングスペースを作る前に
協働オフィスのことは知っていたが、何を
しているかわからない。

○前田教授

目的の共用がしにくい、理解がしにくい
というところか。

●柳川さん（きてきてにいはま+）

私は移住者だから、地元の人達でコミュ
ニティーができていの中に入りづらかった
のかもしれない。

○前田教授

今日移住者の人たちを見るに皆さん仲が
よさそうだし、ネットワークもできている
というのはあるのだが、先ほど地元は優し
いとか応援してくれるというような話があ
ったと思う。そういう人たちとのネットワ
ークもあるのか。それは個人的なネットワ
ークか。地元のグループなどと一緒にやる
ことがあるのか。

●佐藤さん（きてきてにいはま+）

多分それは祭りが一番大きいのではない
か。僕や徳永さんはそうだがUターン側と
しては一旦出て戻ってきたときに、結構付
き合うコミュニティ層が変わったと感じ
ており、帰ってきて1年経つのだが、小中
高の同級生と連絡はしたり多少会ったりは
するが、仕事や今から実際に何かするとな
ったときに明らかに付き合い方が変わった
というのがあって、それは外に1度出たか
ら求めるものや価値観が変わったというの
も多少あると思うが、地元出身者ではある

が地元のコミュニティーに入っておらず柳川さんと何ら変わらない感覚である。サッカーも地元ではあるが、Uターンとかの人もいるので、地元の人100%ではない。

●徳永さん（きてきてにいはま+）

確かに帰ってきたら同級生もたくさんいて会ったりはするが、仕事となると柳川さんの新居浜びが私が帰ってきたタイミングでできたというのがすごく大きい。デザインの仕事を会社勤めではなく、自分でしていきたいと思ったときに、佐藤さんや山本さんや高須賀さんたちとつながったのは柳川さんのところというのもあるし、そこから広がっていったのもすごく大きかった。そこから巡り巡って地元の方とつながることもあり、知り合いの知り合いがすぐつながるくらいの近さはある。

●山本さん（きてきてにいはま+）

2年前に新居浜に来て、入社後1年半くらいは営業職として外回りをしていたが、その時は本当に仕事の横のつながりは私には感じられなかった。どちらかというプライベートの方で、私はフットサルサークルに入っているのだが、そこは誰でもいいのでおいでインターネットで募集していたところで、それならばと思い行ってみた。行ってみたら、まずインターネットで募集していた人と仲良くなって、そこからフットサルに定期的にくる固定メンバーの人達と仲よくなって、車を貸してもらったり、魚をもらったりというようなのはあった。それでも本当に自分から飛び込んでいくというのは人によってはかなり勇気がいることで、私も最初すごく勇気がいった。

●高須賀さん（きてきてにいはま+）

自分から行くのは勇気がいるという話だ

ったが行政が何らかのサポートをしてあげて、人と人をつなぐ役割はできるのではないかと思った。例えば、ここにいる我々は、普通に生活していたら出会わなかったと思うがこうして出会って仲よくなれたし、誰か一人と出会ったらそこからさらにつながれるというのが地方のいいところだと思う。例えば、議員さんは人脈の塊だと思うので、そういう方々と肩書を抜きにして会えたりする場所を作れたり、僕のような高校生と話したりする場所を行政が作れたらいいのではないかと思う。

僕はこんな町だったらいいなと思うことがある。それは、大学生がいる町である。先ほど神野さんが外に出ることを悪だと思わないでほしいと言っていたが、僕もそう思っている。学校の先生ともよく皆が外に出ていろいろな勉強をして、疲れたときにふと帰ってきてくれるような町にしたいと話すことがある。そんな町にしたいし、外に出てそこで活躍してほしいと思っており、外で活躍できるような人間の活躍の場を新居浜にできないかということを考えている。例えば市と南予出身の人が松山大学に行って、そこでいろんな取組をしている中で、新居浜市を活躍の拠点にできないかということを考えることがあって、例えば行政の方々がこんなことができるからと大学生に声掛けし、議員さんやこういう団体と一緒に大学生も一緒に取組ができるようなことで議員さんや私たち団体や行政が、大学生をつなぐとか、地域で活躍してもらったりして、新居浜市が掲げているような新しいをチカラにできるのではないかと感じる。



●伊藤謙司議員

まさにそういう話を聞きたいからこそこういう会を開催している。よかったら高校生の皆さんに議会を見に来ていただきたい。ぜひ我々の活動を見に来てもらいたい。

●高須賀さん（きてきてにいほま+）

見に行きたいのでぜひそうする。

●米谷議員

移住にもいろんなパターンがあるが、提案趣旨にもあるように新型コロナウイルス感染症の関係のテレワーク、テレビ等を見ていると毎日テレワーク云々、移住云々とやっているが、やはり週に1日は東京に行く必要があり東京から2時間圏内や1時間の静岡などへというようなことが多くて、今の仕事を変えて完全に地方に移住してしまうというパターンの比重は少ないのではないかと思っている。あるいは、リタイア組に新居浜にきてもらう、これはやはり公共交通機関の関係でなかなか難しいところもあるのではないかとも思っている。今、大学生云々という話があったが、山本さんは就職で新居浜に来られたと。それまではあまり新居浜に関する情報などもなかったのではないかと思うが、そもそも私は今の大学生、あるいは大学卒業後しばらく就職をしていた方、そういう皆さんに新居浜に来ていただきたい。そこがひとつの大きな

ターゲットではないかと考えているが、そもそもそういう若い皆さんに都会ではなくて、地方に就職してみようという指向があるのかどうかをお尋ねしたい。あるとすると、そういう方にどういう情報を発信したらよいのか、どのような取組をすればよいのか。例えば新居浜に拠点のある企業と自治体が協力して大学生の皆さんに色んな形でアプローチをしていく、例えばインターンシップや大学への働きかけ、あるいは、まさに移住していただいた皆さんのネットワークを生かして新居浜の魅力、出生率云々よりは新居浜で仕事、活躍ができるという情報を発信していくべきなのか。いろんなやり方があると思うが、効果的なものを教えていただきたい。

●山本さん（きてきてにいほま+）

大学生の情報収集能力はたかが知れている。キャリアセンターに行くとか、インターネットで見るとしかない。私は新居浜市のホームページを見る機会が結構あるが、このページに行けばそういう情報が見られるのか、と感じている。私は仕事としてSNSの管理や自社サイトの運営をしているが、この配置は見にくいと思うことが結構ある。新居浜市、大島、白いも、目的の情報までたどりつくまでルートの分かれ道が多すぎてなかなか情報までたどり着けない。そうなるで見やすい、わかりやすい、情報の発信の仕方がまず課題だと思っている。大学生が興味を持つといっても、大手に就職したいという人は都会に行く傾向にあると思うが、その中でも海外に行って起業したいとか、地方で起業したいなどの希望を持つ方はその地域の特色を見て、その情報を得てから移住すると思うので、やはり、

情報の発信力かと思う。

●佐藤さん（きてきてにいはま+）

僕も昨年Uターンする際に新居浜の求人を見たが、情報の発信の仕方や見え方に通じるところがあるかと思うが、新居浜の職種が少ないというのは仕方ないと思うが、似たような職種が並び、給料や休みなどの条件が並んでいて、判断材料が条件しかない。自分は26歳だが、自分たちの世代やその下の世代は、全員ではないが、何をやっているのか、何のためにこの仕事をしているのかという、条件以前にこの仕事をやる意味は何かという部分も大事にしている。そういうフィルターをかけて新居浜の仕事を見ると、求人サイトや会社のホームページを見てもそういったところが見えないのが非常に多いと感じており、そういった意味で言うと発信の仕方が今の若い人を狙っているにしては少しずれていると個人的に感じている。もっと言うと新居浜市も新居浜の企業も、うちのサッカークラブも人が欲しい。人が欲しいのは一緒であるが、それぞれが違う角度でやっているので連携すればいいのではないか。例えば、うちのサッカークラブでいうとJのすぐ下のカテゴリーなので強いリーグにいと、その強いリーグでサッカーをしたいという大学生がいたとする。その新卒の子が新居浜の企業に就職するとき行政が職を斡旋するとか、企業、クラブ、市が三位一体となって連携できれば大学生を1人、2人呼ぶということなどは来年からすぐできると思っており、そういったことを連携してできるようになればいいと個人的には思っている。

○前田教授

時間があつという間に経ってしまった。

最後に一言だけ言いたいことなどあるか。

●井谷議員

今日は本当にありがとうございました。十数年前には考えられなかったようなお仕事をされており、本当に一人一人すごいなと圧倒されている。私の近所に結婚して新居浜にUターンして帰ってきた方がいるが、その相手の方は新居浜のことを自然が豊かで災害も抑えられているというようなところで非常にいいところであるというようなことを言っていた。安心して子育てができるような新居浜市になるようにこちらも頑張っていきたいと思っている。仕事をリタイアして帰ってきた人にも話を聞いたが、新居浜市はいいところだと言われていて、悠々自適に過ごされているが、ただ一つ心配されているのが運転免許証を返納した後の足であった。公共交通が十分でないこと、そういったことも頑張っていかなければいけない課題だと思う。

●黒田議員

今日は本当に貴重な意見をいただき、お礼を申し上げます。皆さんの御意見を生かしながら新居浜に移住していただけるように全力で取り組んでいきたいと思うのでよろしく願います。

まとめ

○前田教授

移住した皆さんの様子も少しお伝えできたかと思う。新居浜のよさがいろいろ出たと思う。人と人のつながりがいいとか、チャレンジできるとか、自分から動く人ととの関係が作りやすいというような話があったと思う。それを一言で象徴するようなキーワードのようなものを考えていくのはあ

りかと思う。それが新居浜はこういう町だ
というキャッチコピーになっていくと思う。
いろんな対象があるかもしれないが、移住
者向けに発信するとしたら、自分のテリト
リー、町の規模が手に取るようにわかって、
町に合わせた暮らし方ではなくて、自分に
合わせた暮らし方ができる町だということ
をお伝えする、そのようなことが発信でき
たらいい。そういうことが一言で伝わるよ
うな、移住者の方に新居浜のよさを伝える
ような言葉をぜひ編み出してもらいたい
と感じた。それをみんなが発信する。具体
的な事象は今日出たような話がたくさんあ
ると思う。ぜひそういうようなことを考え
て、発信していくことによって、移住者の
人の目に留まり、たくさん移住してもらえ
ればいいと思った。



■閉会挨拶 市議会副議長 田窪 秀道

■ 11月26日 (木)

企画教育委員会

テーマ：「移住者から見た新居浜の魅力について」

